

第2節 壁際土坑の敷き石（第12図）

竪穴住居における敷き石を持つ壁際土坑は、昭和40年度の大中遺跡第7次調査の第34号竪穴住居址で初めて検出された。その後、約40年間多くの竪穴住居の調査が行われたにもかかわらず、類例は出てこなかった。今回報告する第22次調査において新たに2棟の壁際土坑に敷き石を持つ類例が加わった。また、平成16年には神戸市西区の吉田南遺跡においても1棟見つかった。

大中遺跡

大中遺跡では第7次調査第34号住居と今回報告する竪穴住居SH2201とSH2203の3棟の調査が行なわれている。いずれも南端に位置する喜瀬川に近い場所にまとまって存在している。

第7次調査第34号住居（第13図）

平面形は6.78m×6.45mの方形で床面積は43.7㎡であり、屋内施設は高床部・周壁溝・支柱穴・中央土坑・壁際土坑がある。

壁際土坑部分を除いて周囲には高床部が存在している。周壁溝は壁際土坑側の2/3に廻っており、壁際土坑に接続している。土坑は92cm×178cmで方形、下部は44cm×58cmの円形で深さは58cmある。上部の92cm×178cmには礫を敷き詰めている。

SH2201

平面形は5.85m×5.90mの方形で、床面積は34.5㎡であり屋内施設は高床部・周壁溝・支柱穴・中央土坑・壁際土坑がある。ただ高床部や周壁溝はほとんど残っていない。

壁際土坑は東壁中央に接して存在している。土坑は105cm×120cm程度で、深さは最大で47cmを測る。礫が存在しない部分もあるが、75cm×90cmの方形に近い範囲に敷き詰めている。

SH2203

平面形は6.5m×6.2mの方形で、床面積は40.3㎡であり、屋内施設は高床部・周壁溝・支柱穴・中央土坑・壁際土坑がある。

壁際土坑は南東壁中央に接して存在し、周壁溝が接続している。土坑は床面から続く周囲の部分と中央の深くなる部分とがある。周囲は160cm×100cmの範囲に小垂円礫を敷き詰めており、残りのよい西南側は土坑中央部に向って約18°傾斜している。土坑中央部は東北－西南55cm、南東－北西35cmの隅丸長方形で、深さ85cmを測り直線的に掘り込んでいる。

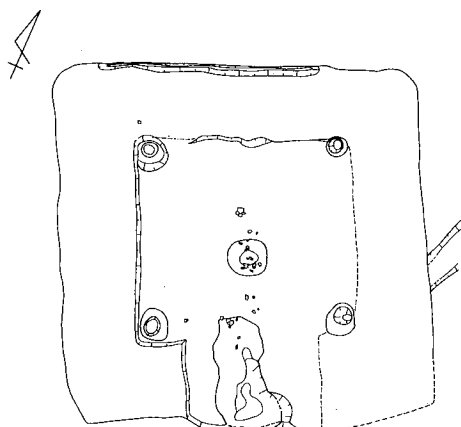
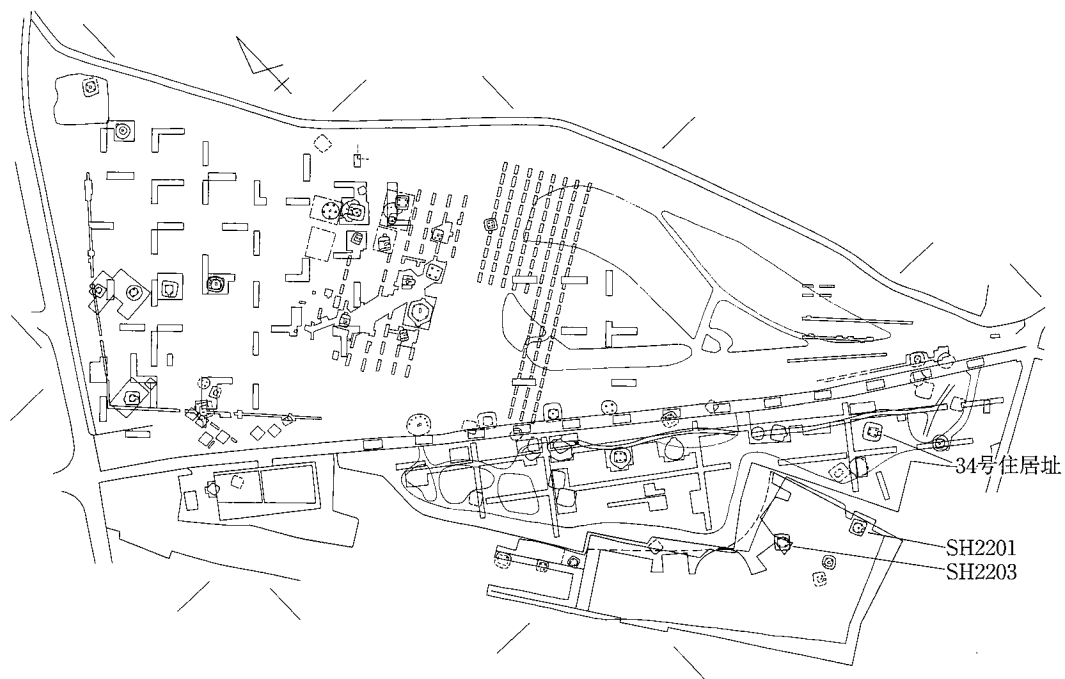
以上、大中遺跡での敷き石を持つ壁際土坑を有する竪穴住居の概要である。また敷き石を持つ壁際土坑を有する竪穴住居の分布は喜瀬川沿いの南端部に位置しており、いずれも高床部を持つ方形竪穴住居であり、壁際土坑は地形的に低い南側に存在している共通性がある。

壁際土坑の構造は上部と下部に分かれ、上部は中心に向かって緩やかな傾斜をしており、いったん掘削した後、石を敷き詰めている。

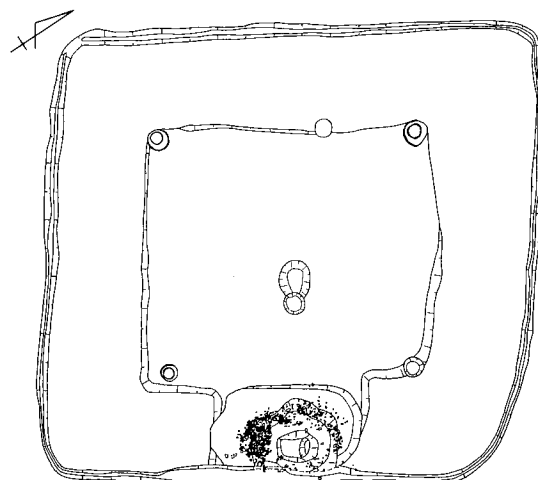
下部は急な傾斜で50cm前後～85cmと深い形態をしている。埋土が徐々に埋まった堆積状況や土器の出土状況から、使用されていた当時は水がたまっていたなどの空間が存在していたと考えられる。

それぞれの竪穴住居の時期は、出土土器から庄内併行期に位置づけられ、岸本の分析により、若干時期差が認められ、SH2201→SH2203→第7次調査第34号住居と変遷している。

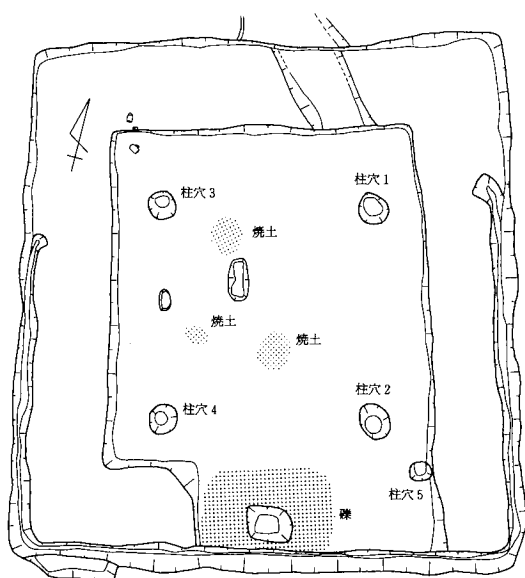
壁際土坑に貼り付けている石は大中遺跡周辺の表層には小礫を含む土層は存在していないため、すぐ東側を流れる喜瀬川の石を採集し、敷き詰めた可能性が高い。



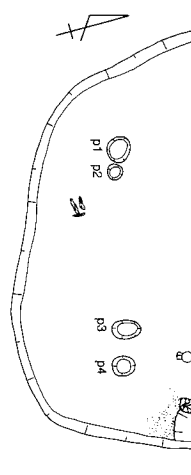
大中遺跡 SH2201



大中遺跡 SH2203



大中遺跡34号住居址



吉田南遺跡 SB208



第 12 図 大中遺跡の敷き石のある竪穴住居位置と関連住居図

吉田南遺跡

吉田南遺跡は神戸市西区の明石川下流域に存在している。壁際土坑に敷き石が存在する竪穴住居はSB213である。調査範囲が限定されていたため、竪穴住居の南側半分ほどが調査されただけであるが、一辺 5.6 m の隅丸方形で、立て替えを想定する柱穴 4 本と東壁中央に壁際土坑が存在している。周壁溝は存在おらず、壁際土坑は南側半分の調査である。壁際土坑は東西 60 cm、深さ 15 cm で、南側に幅 55 cm と西側に幅約 20 cm の範囲に直径 5 cm 以下の小礫を貼り付けている。土坑内からは完形の鉢が出土している。

隣に位置する竪穴住居 SB208 には排水溝が設置されており、東側に傾斜していることが窺える。したがって敷き石が存在する土坑は地形的に低い場所に存在している。

敷き石の機能と壁際土坑

この敷き石については報告書で上田哲也氏が「この装置は溝を通じて流れてきた水が方形ピット内に流入してきた場合に床面の湿化を防ぐ目的で考案したものと推察され」「周壁を廻る溝と連なり、降雨時の屋内の出水を溜めるための機能を備えたものなどがある。上部の方形部分は上記の機能を果たすためのものと考えられ、深さが 3～5 cm と浅いところを見ると、円形ピットを保護するために板材等を敷き並べて覆うものと思う。中央部の円形ピットは直径 30～40 cm、深さ 30～65 cm と深く垂直に掘っており、その深さを保つために、ピット内の自然埋没を防ぎ保護するためであろう。」「第 34 号住居址の上部方形下部円形ピットの周囲に礫を方形に敷きつめているのはピット内に水が溜まり、床面が軟弱になるために用いた防水対策である。」としており、敷き石を伴う壁際土坑は竪穴住居の壁溝を通じて出水を溜めるための施設だとしており、さらに下部の円形ピットを保護するために周囲に礫を方形に敷きつめたとした。また板材で覆っていたことも想定している。ただし土坑機能の多様性や季節性も十分考慮する必要があるとしている。

平成 14 年度～16 年度にかけて調査が行われた大阪府八尾南遺跡では水成堆積物により遺構面全体が覆われていたため、ほぼ当時の状況で残されていた。特に竪穴建物 9 は上屋を構築する部材は基本的に持ち去られていたが、壁溝や排水溝は有機質の構造物も含めて良好であった。周壁溝は幅 10 cm～15 cm、深さ 15 cm を測り、上面には長さ 10 cm～15 cm の細い横木を渡し、その上に直交する繊維質の蓋を被せる構造をとり、この竪穴は周壁溝が暗渠として機能していたことになる。排水溝につながる中央土坑は被熱の痕跡は認められず、木の板で構造物を作っていた。中央土坑は水にかかわる遺構であると考えられる。

以上、八尾南遺跡の良好な調査例で、大中遺跡第 7 次調査の第 34 号竪穴住居の調査が行われてから約 37 年経た今、敷き石を持つ壁際土坑の機能が上田哲也氏によって推定されたことが、実証された。



第 13 図 大中遺跡第 34 号住居址壁際土坑

註

- ・上田哲也「堅穴住居址の遺構と機能」『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会 1990年
- ・播磨町教育委員会『播磨大中遺跡の研究』 1990年
- ・神戸市教育委員会『吉田南遺跡 第17・18次調査 発掘調査報告書』 2006年
- ・岡本茂史「集落から見えるもの－八尾南遺跡を中心として－」『2005年度（財）大阪府文化財センター・弥生文化博物館共同研究発表会 弥生後期集落の景観的研究』（財）大阪府文化財センター 2006年
- ・岡本茂史「八尾南遺跡の発掘調査－弥生時代後期前半の遺構を中心に－」『大阪府埋蔵文化財研究会（第51回）資料』（財）大阪府文化財センター 2005年